

国際的リーダー育成プログラム Leader's Camp での学生の活動

広島大学大学院工学研究科 学生会員 ○河野 真弓

広島大学大学院工学研究科 学生会員 松原 功馬, 福島 博貴, 森 由美,

宮本 和也, 土居 直樹, 上野 耕平

表-1. Leader's Camp 2012 の日程表

(※下線部は特に本文で取り上げたもの)

Date	Contents
8/16	Arrive at Hiroshima Univ.
	Orientation 1
8/17	ICCEE , <u>Student Work shop</u>
8/18	ICCEE
8/19	<u>Keynote Lecture1,2</u>
	Orientation 2 (Group make ,Lab posting)
8/20	<u>Keynote Lecture 3,4</u>
	Discussion about Form of Presentation
8/21	<u>Keynote Lecture 5,6</u>
	Preparation for Presentation
8/22	Pre-presentation
8/23	<u>Presentation and Discussion</u>
8/24	<u>Final Presentation</u> ,Review of LC
	Farewell Reception
8/25	<u>Study Tour</u>

1. はじめに

日中韓台の4大学が共同し、合宿形式のリーダー育成プログラム Leader's Camp (以下, LC) を2012年1月より開催している。LCは、将来の社会基盤のニーズを捉え地域及び地球規模の環境問題に配慮し災害に強い21世紀型社会基盤構築のリーダーの育成を目指しているプログラムである。LCは、夏期休暇あるいは4大学の主催する国際会議(ICCEE)開催時期を利用して4大学持ち回りで実施し、特定テーマを題材に実施する10日程度の合宿形式の授業として計画されている。今回報告する第2回のLCは第1回LCの実施後に行われた反省会で、「学生の国際交流以上の付加価値のある企画を実施すべきである」との指摘を受けたことを踏まえ、学生による「専門的で活発な議論の場を構築する」ことを目的としている。

第2回LCにおいても第1回LCと同様に、集中講義・グループワークを軸に全11日間の日程が設計された。この日程の検討において、著者らは、学生がリーダーシップを発揮できる教育の場を計画するために必要な事項を検討した。本稿では、その検討結果を述べる。

2. LCへの学生の取り組み

LCへの参加大学は、広島大学・日本(広島)、大連工科大学・中国(大連)、台湾国立中央大学・台湾(桃園)、釜慶大学校・韓国(釜山)の4大学である。各大学からは3名ずつが参加し、広島大学から修士8名、学士3名の計11名の学生が参加した。

2-1. 前年度の取り組みと反省

前年度のLCでは、毎年各大学が持ち回りで開催できる可能性を把握すること、毎年広大で実施した場合の負担等について検討することを副目的として行ない、防災分野に関する基礎・応用知識、最先端技術に関する集中講義、関連する特徴的なプロジェクトの事例研究を合宿形式で実施し、最先端技術や高度化技術を体得させることを主目的として実施した。

実施した結果、2点の課題が挙げられた。

課題①：討論テーマの選定

討論テーマの選定をプログラムに組み込んでいたが、選定に時間がかかり、討論の時間を十分に確保できなかったことで、専門性のある議論を行えなかった。

課題②：プログラムへの意識の共有不足

一部の主催学生への負担が大きい一方で、主催学生以外の参加学生がプログラムの意義を理解しない状態で参加していた。

2-2. 課題解決のための主催学生の取り組み

本年度の LC では上記 2 点の課題を解決するため、表-1 に示すように主催学生によるプログラムの設計が行われた。準備期間（5 月中旬～8 月上旬）中に主催学生によるプログラムの設計・精査、全体テーマの決定、各国参加学生への企画概要の通知が行われた。通知の中で、討論テーマの選定を 8/17 の Student Workshop（以下、SW）で行うことを伝え、課題①の解決を図った。さらに、企画概要を事前に通知しておくことで課題②の解決を図った。

最終成果発表会である、8/24 の Final Presentation（以下、FP）に向けて、8/17 の Student Workshop（以下、SW）では討論会テーマの選定、8/23 の Presentation & Discussion（以下、P&D）では学生間の集団討論がそれぞれ行われ、この 3 企画の流れを LC の軸とした。

3. 主催学生としての意義

今回主催学生として参加した著者らは、以下に掲げる 6 つの能力がリーダーに必要であると考えた。

- ① 対外発信能力
- ② 国際的対話力
- ③ 判断力・思考力
- ④ 決断力
- ⑤ 統率力
- ⑥ 異文化理解

そして、これらの能力向上を図るために各企画でどのような取り組みを行うべきかを検討した。

LC プログラムの主目的は「アジアの社会基盤をリードするリーダーの育成」、「学生による専門的で活発な議論の場を構築すること」である。後述の目的を達成するため、本年度の LC での話し合いにおけるテーマは「アジアの防災」とした。これは「防災を考える中で、相反する両立困難な対立項（ジレンマ）が発生すると考えられるが、そのジレンマを解決することこそがリーダーに求められる力ではないか」という着想から設定された。

各企画において、上述のどの能力を向上させることができるかを図-1 に示す。具体的な概要と実施結果、参加学生が感じたことなどは次章で詳しく述べる。

4. 各企画を実施して

4-1. Student Workshop (SW)

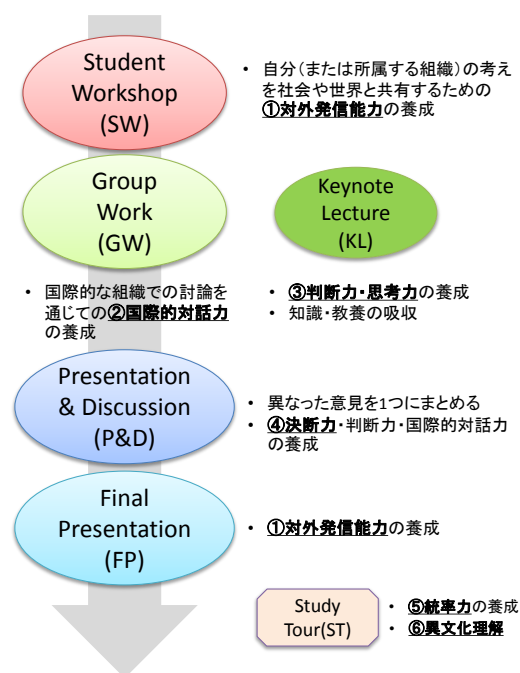


図-1. 各企画における狙い

(1) 概要

SW では、討論テーマとなるにふさわしい 1 つの災害を選定することを目的とした。前年度の課題①である討論テーマの選定を LC 期間中にスムーズに行うため、あらかじめ各国で討論テーマ案を出し合うことを LC 開催前の各国参加学生への企画概要通知に含めた。SW では、①対外発信能力の養成に重点を置いている。

(2) 実施内容

各国参加学生に、それぞれ 10 分の発表と 5 分の質疑応答時間をあたえ、本企画中に最も取り上げるにふさわしいと考えるテーマ（災害）を主張してもらった。各国の発表・質疑の後、議論の時間を設け、主張された災害の中から 1 つをピックアップし、討論テーマを選定した。

各国の発表内容について、着目した災害・その災害に着目した理由を表-2 にまとめる。各国学生が最も重要視する災害はそれぞれ異なることがわかる。

発表の後、主張された 4 種の災害について共通点・相違点に着目しながら話し合いを重ねたが、各国での災害事情が全く異なることから、共通認識を得ることは困難であった。最終的に、水害や地震等の自然災害時に地滑りも発生すること、地すべり発生までの短時間性や偶発性による危険性・アジアのどこでも起こり得るという観点から、「地滑り」を討論テーマに選定し

た。

(3) まとめ

SW では、学生が質疑応答する雰囲気を作り出すことに成功し、参加者全員が積極的に発言できる環境となり、リーダーに必要な対外発信能力の養成につながった。また、SW 時間内にテーマが選定できたこと、各国が専門性を発揮できるような討論テーマ案を提出していたことから、昨年度の課題①の解決につながった。しかし、各国学生が自身の国事情に重きをおき、アジア全体を包括的に考慮できず、テーマ決めに難航する一面も見られた。このことから、議論をまとめる為には、各学生がそれぞれの考えや立場の違いを理解すること（協調性）も重要だと感じた。また、様々な意見をまとめ上げるためには、対外発信能力の他に、異なった意見を一つにまとめる④決断力も必要であると感じた。

4-3. Keynote Lecture (KL)

Keynote Lecture では、参加大学の教員による「ジレンマの発見」・「ジレンマの解決」をテーマとした特別講義を受けた。これらは、直接的な知識づくりではなく、③判断・思考力の養成がメイン目的である。

全ての Lecture を終えての感想として、「他国の土木技術の発展のプロセスを知ること、新たな知識を身に着けることができた」や「成功の裏には失敗があり、困難に直面した時自分ならこのように考えるだろう」という判断力・思考力の養成および知識・教養の吸収につながった。

4-4. Group Work・Presentation & Discussion (GW・P&D)

(1) 概要

GW では、SW で決定した討論テーマとなる「アジアで発生した地滑りに対して、どう対処・対応すべきか」について各グループにわかれ話し合った。各グループには日中韓台の各国の学生が含まれ、国際的な組織での討論においての国際的対話力の養成を目的とした。また、各グループの検討結果は、ppt にまとめて全体で発表した(写真-1)。その上で、各グループの意見を集約し、LC 参加学生全員の代表意見を作成した。これらは、リーダーに必要な異なった意見を1つにまとめる④決断力の養成を目的としている。

(2) まとめ

GW では、他国学生との意見交換に四苦八苦している様子が見受けられた。参加学生の感想として、「自国

表-2. 討論テーマに選定する災害の案

国	災害	理由
日本	水害	アジアには台風や豪雨が多く、水害により、多くの二次被害をもたらすため
中国	地震	地震により、多くのインフラが停止し、社会に与える影響が大きい
韓国	台風	アジアでは台風が多く発生し、その被害や二次被害をもたらすため
台湾	地滑り	山間部に囲まれている地域が多く、命の危険性が大きい



写真-1. P&Dの様子

の学生と英語で会話するのは違った緊張感があった。」や「専門用語がわからなくとも、伝えようとする意志が大切であることがわかった。」など、国際的対話力の養成まではいかなかったにしろ、英語に関する意識の変化を実感できる結果となった。

一つのテーマについて各グループがいくつかの視点からアプローチをしているため、まとめの作業は難航することもあったが、最終的に、各グループの良いところを出し合うということで意見がまとまった。

4.5 Final Presentation (FP)

FP は、議論を行ってきた総括として、「アジアで発生した地滑りに対して、どう対処・対応すべきか」について最終成果の発表が目的である。FP の発表者は、各国で代表1人を選出した。

FP の内容は、各グループで話し合われた「アジアで発生した地滑りに対して、どう対処・対応すべきか」の意見を集約したものである。しかし、教員の意見として、「元からある技術の知識発表にしかなくない。」や「どの立ち位置で物事を見定めているのかが明確でない」などの短期間でのまとめの甘さ、テーマの定義のあいまいさを指摘される面もあった。これらについては、今後の検討課題として残った。また、FP に

向けての ppt 作成については、FP 発表者が代表して作成したため、一部の学生に負担がかかってしまう結果となった。これについては、改善の余地があると考えられる。

4.6 Study Tour (ST)

(1) 概要

ST では、LC の SW, P&D, FP の 3 企画の派生として、主催国日本（広島）での研修旅行を行った。これは、社会基盤整備は自然環境を保全と相反する側面を内包しており、今後の持続可能な社会基盤整備には過去・現在・未来へ続く環境への理解が欠かせないという理由から企画された。ST では、広島の社会基盤整備の現状に触れるという目的の他に、リーダーに必要な⑤統率力、⑥異文化理解を養成するという目的がある。

本 ST では、1. 広島の地域を治めていた当時のリーダーはどのような社会基盤の整備をしたのかを知り、アジアの社会基盤整備に通ずるものを発見するため、広島城周辺、2. 広島の今と昔の社会基盤整備事業を学ぶため雁木タクシーによる河川クルーズを選んだ。

(2) まとめ

広島の地域を治めていたリーダー達が、それぞれの時代にどのような社会基盤の整備をしたのかを知る場として、広島城と縮景園へ他国学生を案内した。建築物の雄大さや日本文化に加えて、日本人の守っている自然の美への意識にも共感してくれた。

今回、初の試みとして、雁木タクシー(写真-2)を利用した。広島市は古くから川と暮らしが密接に結び付いている地域である。川の水路利用により水運が古くから行われている。現在も使われている雁木が数多く存在する太田川周辺河川を巡るクルーズにより、現在の私達の暮らしにどう結びついているのかを考えながらのクルーズとなった。留学生はもちろん、日本人学生も初めての雁木タクシーでは、普段気が付かない広島の歴史を垣間見ることができた。

ST では、主催学生が他国学生を案内する形となったが、日本（広島）の社会基盤整備の歴史、現在の社会基盤整備の現状・過去との調和を一番伝えることのできる旅路を考えるのに困難を極めた。なぜならば、主催学生自らが広島の社会基盤整備の歴史、現在の社会基盤整備の現状を知る必要があったからである。

つまり、ST では、リーダーに必要な統率性、異文化理解に加えて、自国の文化の理解を深める必要がある



写真-2. 雁木タクシーの様子



写真-3. LC 参加者の集合写真

ことに気が付いた。

5. おわりに

アジアのリーダーになるためには、上述する 6 つの能力が必要不可欠であると掲げ、これらの能力を向上させるにはどのような企画を行うべきかを検討した。

その結果、すべての能力を意識することについて、本企画は有効であることがわかった。また、上述した 6 つの能力に加えてリーダーに必要な能力として協調性、自文化理解も必要であることがわかった。

また、課題点としては以下の 2 つがあげられる。

①最終発表内容の向上

②プログラムへの意識の偏り

まとめると、本企画は短期間であり、全ての事項が完璧に備わったとは言い難い。しかし、このような教育の場を設けることにより、参加学生の意識改革にはつながったと考える。また、写真-3 に示す今回の参加学生のネットワークが、10 年、20 年と続いていくことが重要であると思われる。